

五、論文口頭發表大綱②

森鷗外『青年』における小泉純一の情的表現

—お雪さんを中心にして—

淡江大学 助理教授

廖 育卿

1. 始めに

『青年』¹は森鷗外の最初の長編小説でもあり、小倉左遷から復帰した明治四十三年に発表された代表的な作品の一つでもある。主人公小泉純一は作家という文学志望を持って上京すると、同郷の先輩作家大石路花のもとを訪ね、親しくなった医学生大村を知って啓発されたりしていた。平田拊石のイプセン論聴講、イプセンの「ボルクマン」観劇で未亡人である坂井夫を知り、そのなぞの目に誘われて交渉を重ねた。恋愛感情のない性慾をふり切った「寂しさの中から」、〈現社会〉を描くことに志した小泉純一は、〈伝説〉を書く企てに目を向けていく。

先行研究においては、『青年』は長い間、失敗作だと評価されていたが、日夏耿之介は『鷗外文学』²で「傑作」と評している。そして、長谷川泉には『青年』について三つの主軸³が絞り出しされている見解を持っている。その中に注目したいのは、女性との遍歴によって上京した小泉純一の成長した過程を言及したものである。この純一の恋愛と性慾体験について、小泉浩一郎は純一が植長の上さんのお安に、坂井夫人と対極の〈女といふ自然〉を見出す点に着目し、それを大村の利他的個人主義の観念性と拮抗する《近代》の毒にも染まらぬ人々〉の発見と位置付け、さらに〈伝説〉へ向う契機を見ている⁴。

一度『青年』に女性登場人物の描写を確認してみれば、確かに有楽座の自由劇場で知り合った法学者坂井博士の未亡人を中心に描かれている傾向が見られる。これに対し、Y県から上京してきた小泉純一が貸家を探した時に出会った銀行頭取の娘であるお雪さんとの関係の描写は、少ないが対照的である。また、これまでの先行研究では、小泉純一と坂井夫人との関係に注目した論議が多いが、お雪さんとの間に存在する異様な感情について論じるものがあまりないようである。

¹ 『青年』(『スバル』、明治43年7月から明治44年8月まで連載)は、『三四郎』への技癡が執筆動機とされ、当初「小野純一」なる題であった。本論の引用は鷗外全集第六巻によるものである。

² 実業の日本社、昭和19

³ 長谷川泉『森鷗外論考』(明治書院、昭和37.11)によって、『青年』の三つの主軸は次の三つに分けられる。

(1)純一の創造力が芸術家として成熟する過程

(2)純一の人生観・世界観、とくに自然主義勃興当時の個性の覚醒や新時代の道徳思想などに促されて成長してゆく考え方の形成過程。

(3)純一の恋愛及び性慾の体験。

⁴ 「『青年』(森鷗外)」『国文学 解釈と鑑賞』(平成元.6)

そこで、本研究では、『青年』における小泉純一の恋愛及び性欲の体験に着目し、彼の情的表現を考察していく。坂井夫人に出会う前のと、坂井夫人と知り合った後に分けて、お雪さんとの付き合いから青年小泉の情的表現及び、その変化をたどっていくことを目的とする。

2. お雪さんへの「純愛」の思い

本節では、坂井夫人に出会う前の描写を中心に考察していく。

お雪さんとの初対面は、東京で居所を探していた時の事であった。「幅の広いクリム色のリボンを掛けた束髪」のお雪さんは、大きい目で純一を見つめている。のち、初音町に引っ越した一週間後の天長節の朝、同じくクリム色のリボンをついているお雪さんは、ダリア花を亘って興味津々に純一の借家を見ている。まだ言葉を交わしていないが、純一はこの「クリム色のリボン」と宮島で見た鹿の目と比喩された「大きい目」をお雪さんの象徴とし、彼女の可愛らしくスマートなイメージを描き出している。

大家である婆さんの紹介により、互いに挨拶した二人の態度は際立っている。

飲み掛けた茶を下に置いて、これも黙つてお辞儀をした純一の顔は赤くなつたが、お雪さんの方は却つて平氣である。そして稍稍身を反らせてゐるかと思われる位に、真直に立つている。純一はそれを見て、何だか人に逼るやうな、戦を挑むやうな態度だと感じたのである。（P. 296）（傍線発表者、以下同）

お雪さんの泰然自若に対して、純一の赤面は極不自然である。純一が感じたお雪さんの「何だか人に逼るやうな、戦を挑むやうな態度」は、都会のお嬢さんの気高い一面が示されている一方、相手を観察する純一の感性が高いことを意味している。ただし、この感性の裏には、相手への観察の鋭さと敏感さが内包されている。

「あなたお国からいらつしつた方のやうぢやないわ」

純一は笑いながら顔を赤くした。そして顔の赤くなるのを意識して、ひどく忌々しがつた。それに出し抜けに、美中に刺ありともいうべき批評の詞を浴せ掛けるとは、怪しからん事だと思った。（P. 297）

そして、純一の赤面になった原因を探求してみれば、自分の身の上によつたものであろう。大石狷太郎を訪ねた時に、田舎から出てきた純一は不慣れな外国語を使うように、小説で読み覚えた「東京詞」を使った。この都会には、田舎者である自分が異質的な存在だと思われたくないで、わざと相手に合わせたのである。しかし、お雪さんの素直に問うた質問であるが、この質問は彼女に見抜かれたことのように、純一の気掛かりのことを不

意に打ち明かした。元来地方の資産家の一人息子である小泉純一と、銀行頭取の娘であるお雪さんの、家庭状況は類似するはずである。だが、東京に生まれ育てられたお雪さんの前に、田舎出身の身の上に不面目に感じながら、純一には若干劣等感を持っているかもしれない。このように、純一の赤面は単に女性に直面する恥ずかしさだけでなく、自分が田舎の身の上にも関わっているのではないか。

この妙な雰囲気は、暫く二人を無言の窮地まで追ってしまった。沈黙の緊張感から二人を救出したのは、突然飛び降りてきた雀である。

純一は起つて闇際まで出た。雀はついと飛んで行つた。お雪さんは純一の顔を仰いで見た。

「あら、とうとう逃がしておしまいなすつてね」

「なに、僕が来なくたつて逃げたのです」大分遠慮は無くなつたが、下手な役者が台詞を言うような心持である。

「さうぢやないわ」 詞遣は急劇に親密の度を加へて来る。少し間を置いて、「わたし又来てよ」と云うふと思ふと、大きい目の閃を跡に残して、千代田草履は飛石の上をばたばたと踏んで去つた。 (P. 298)

長い沈黙から開放され、二人の再開した会話では、距離感が一瞬縮んだ。ここで、いきなり敬語から「さうぢやないわ」という常体へ言い直したお雪さんの言葉遣いから見れば、彼女は純一に対する程度的好感を抱いているに違いない。

純一は先の日にちらと見たばかりで、その後この娘の事を一度も思い出さずにゐたが、今又ふいとその顔を見て、いつの間にか余程親しくなつてゐるやうな心持がした。意識の闇の下を、この娘の影が往来してゐたのかも知れない。 (P. 295)

貸家でお雪さんに再会したばかりの純一は、無意識的に彼女に親しくなっていることに気づいた。それは、これまで見てきたように、お雪さんは純粋で素直な少女に造形されているからであろう。つまり、純一のお雪さんへの思いは、精神的なものに留まり、肉体や性欲などには連想していないのである。このように、純一とお雪さんとの間に存在するのは、「純愛」のようなものだといつてもよからう。

3. お雪さんへの感情の変容

これまで見てきた小泉純一のお雪さんへの感情は、単に純愛のようなものに見えるが、坂井夫人を知ったことにつれ、お雪さんに対する感情は徐々に変容してしまう。

上京した四週間後、有楽座ヘイプセンの劇を見に行ったとき、小泉純一は偶然未亡人で

ある坂井夫人に知り合った。その後純一は坂井夫人のことが忘れられなくなる。たとえ「あの坂井夫人は決して決して己の恋愛の対象ではない」と考えた純一は、坂井夫人のことを思い続けている。そして、思わずお雪さんのことと比べてみた。

あのお雪さんは度々この部屋へ来た。いくら親しくしても、気が置かれて、帰つたあとではつと息を衝く。あの奥さんは始めて顔を見た時から気が置けない。この部屋へでもずつと這入つて来て、どんなにか自然らしく振舞ふだろう。何を話さうかと気苦労をするやうな事はあるまい。話なんぞはしなくても分かつてゐるというやうな風をするだらう。 (P. 349)

純一はにとって、人妻でもあれば、未亡人でもある坂井夫人は、大人の女性の魅力の持ち主である。これに對照し、無邪気なお雪さんはむろん稚拙な存在である。しかし、このような考え方には、久しぶりにお雪さんに会ったときに、異様なな変化が起っている。

障子はこの似つかはしい二人を狭い一間に押し籠めて、外界との縁を断つてしまつた。併しこういふ事はこれが始めではない。今まで度々あつて、其度毎に純一は胸を躍らせたのである。

(中略)

頬から、腮から、耳の下を頸に掛けて、障つたら、指に軽い抗抵をなして窪みきうな、鶴色の肌の見てゐると、ペエジを翻す手の一つ一つの指の節に、抉つたやうな窪みの附いてゐるとの上を、純一の不安な目は往反してゐる。

(中略)

ママ
袖と袖と相触れる。何やらの化粧品の香に交つて、健康な女の皮膚の匂がする。どの画かを見て突然「まあ、綺麗だこと」と云つて、仰山に体をゆすつた拍子に、腰のあたりが衝突して、純一は鈍い、弾力のある抵抗を感じた。 (P. 376)

以上見て分かるように、純一は情慾のある目でお雪さんを見ている。純一の女性の肉体への渴望は、突然意識したお雪さんの体によって不安に転化した。そして、思い掛けない体の接触は、純一を反射的にお雪さんの側から立って去つた。なぜなら、純一はお雪さんへの思いを精神的な純粹性・無垢性を確保していこうとするのである。

純一は相触れんとするまでに迫まり近づいた、知らぬ女の顔の、忽ちおちやらになつたのを、少しも不思議とは思はない。馴馴しい表情と切れ切れの詞とが交はされるうちに、女はいつか坂井の奥さんになつてゐる。純一が危い体を支へてゐようとする

努力と、僅かに二人の間に存してゐる距離を縮めようと思ふ慾望とに悩まされてゐるうちに、女の顔はいつかお雪さんになつてゐる。 (P. 416)

坂井夫人へ情欲の満足を求める所とする純一は、彼女が箱根へ行くことを思いながら、災難のような夢を見ていた。悪夢の中に現した女の顔は、おちやらになつたり、坂井夫人になつたりした。最後にお雪さんの顔になっていた時に、純一は半醒覚の状態にあつた。

フロイトの夢分析理論によれば、夢は人間の願望を満たすためのものである。夢には願望がそのままの形で現れる場合と、潜在的な願望が形を変え歪曲されて現れる場合がある。特に潜在的な願望とは本人にも分からぬような抑圧された無意識的な願望のことで性愛的な願望が常に含まれているといわれている。よって、純一の夢の最後にお雪さんが現れたのは、純一にとって単に彼女への精神的な懸念だけではないことが説明できよう。

また、ここで坂井夫人についての描写から、改めて小泉純一のお雪さんへの気持ちを確認しよう。

己は何か言ひながら、覚えず奥さんの顔とお雪さんの顔とを較べて見た。まあ、なんといふ違いようだらう。お雪さんの、血の急流が毛細管の中を奔つてゐるような、ふつくりしてすべつこくない顔には、刹那も表情の変化の絶える隙がない。埒もない対話をしているのに、一一の詞に応じて、一一の表情筋の顫動が現れる。Naifな小曲に sensibleな伴奏がある。

それに較べて見ると、青み掛かって白い、希臘風に正しいとでも云ひたいやうな奥さんの顔は、殆ど masque である。仮面である。表情の影を強いて尋ねる触角は尋ね尋ねて、いつでも大きい濃い褐色の瞳に達してそこに止まる。この奥にばかり何物かがある。

(中略) 美しい死人の顔色と云つても好かろう。 (P. 384)

坂井夫人と一緒にいることにして、小泉純一の潜在意識においては、お雪さんのことと比べてみないわけにはいかない。引用にも明らかのように、坂井夫人が発散していた大人の魅力はお雪さんの純粹さに匹敵できないのである。と同時に、純一のお雪さんへの感情は映り出されて、改めて確認できたのではないか。

このように、『青年』における純一の性慾体験では、坂井夫人だけでなく、お雪さんも大きな役割を果たしているのに違いない。お雪さんへの思いが対照されるからこそ、坂井夫人への思いはただ情慾のようなものに過ぎないのを確認できたのである。換言すれば、お雪さんへの情的表現及びその変化は、純一の恋愛にも性慾体験にも一種の通過儀礼と見てよいであろう。強いて言えば、このお雪さんに対する情的表現であるこそ、〈小説〉を志した純一はそこから 〈伝説〉 へ転向する理由の一つであるかもしれない。

4. おわりに

坂井夫人に対して、性的衝動を持っている小泉純一は、精神と肉体の極に揺り動かされる。坂井夫人との不毛の性体験を振りきり、その寂しさの中から、お雪との純粋な感情に回帰したのである。本研究の考察から、お雪さんへの情的表現及びその変化は、純一の恋愛にも性慾体験にも一種の通過儀礼である、という結論を得た。

また、以上見てきた小泉純一の情的表現の考察から、明治四十二年に発表された鷗外の『ヰタ・セクスアリス』を想起せねばならない。『青年』における小泉純一の性慾体験は、『ヰタ・セクスアリス』以来の、鷗外における性愛に関する告白のモチーフとの結合が生じてくると思われる。鷗外の『ヰタ・セクスアリス』における金井湛の性欲体験によっての〈自我〉の成長に合わせ、鷗外作品の創作系譜を試みることを、今後の課題としたい。

テキスト

『鷗外全集』第六巻 岩波書店

参考文献

- 樋口正規 (1972) 「「青年」の周辺—「利他的個人主義」と「安心立命」をめぐって—」『文学』第40巻第11号 岩波書店
- 助川徳是 (1980) 「「青年」の表現過程—「九」回を中心に—」『国文学 解釈と鑑賞』第45巻第7号 至文堂
- 稻垣達郎 (1969) 『森鷗外必携』學燈社
- 竹盛天雄 (1994) 『鷗外 その紋様』 株式会社小沢書店